

否定

レクチャー1

強意の否定表現。

強意の否定表現とは、「決して～ない」「全く～ない」「どうしても～ない」といった表現のことで、「決して」「全く」「少しも」「どうしても」等のフレーズで否定の意味を更に強めるものです。

それぞれのニュアンスの違い(特に「決して～ない」と「全く～ない」)や、その種類など、きちんと整理しておきましょう。

(1)「決して～ない」のいろいろな表現。

①never: 「決して～でない」「一度も～ない」

=not~ever

(ex) You should never walk alone at night.

夜の一人歩きは決してしてはいけない

會日本語でいくら「決して～ない」と表現できたとしても、単にその一時だけのことを表現するには never は普通使わない。その場合には not ~at all(又はそのイコール表現)を用いる。つまり never は「習慣性」「経験」を含意する。したがって「私は決してそれに満足ではない」という場合、そこに「習慣性」「経験」が含意されているとは言い難いので、

I am never satisfied with it.

とは言わずに

I'm not satisfied with it at all[by any means].

I am by no means satisfied with it.

と等と表現するのが一般的である。

② **on no account** ☞この account は「理由」という意味。

=not ~ on any account

(ex) You must **on no account** do such a thing.

そんなことは絶対にしてはいけない

③ **in[under] no circumstances** ☞circumstances は「状況」という意味。

=not ~ in[under] any circumstances

(ex) **Under no circumstances** should you tell another lie.

いかなる事があっても二度とうそをついてはならない

④ **in no sense[way]**

=not ~ in any sense[way]

(ex) You should **in no sense** walk alone at night.

決して夜1人で歩いてはいけない

(2) 「まったく(少しも)~ない」のいろいろな表現。

① **not~at all**

(ex) I'm **not hungry at all**. 少しも腹がへってない

② **far from~**

(ex) I'm **far from satisfied** with the result.

私はその結果に全く満足していない

③ **not a bit** cf; not a little「少なからず、非常に」

(ex) I'm **not a bit** hungry. 少しも腹がへってない

④ **not~in the least**

(ex) I'm **not in the least** tired. 私はちっとも疲れていない

⑤anything but～

(ex) My wife is **anything but** a good cook. 私の妻は料理がまるきりへたです

⑥by no means～

=not ~ by any means

(ex) I am **by no means** satisfied with the result.

その結果には全然満足していない

⑦in no way～

=not ~ in any way

(ex) He was **in no way** to blame. 彼は少しも悪いところはなかった

be to blame: 責任がある

⑧no～what (so)ever

(ex) There is **no doubt whatever**. 何の疑いもない

《whatever に関する補足》

(1)訳し方

①whatever節が「S、O、C」になっている。又は前置詞の後ろで。

⇨ 「～なものは何でも」 (名詞用法)

(ex) You can do whatever you like.

〇

好きなことは何でもしていいです

②whatever節が「S、O、C」にならない場合。

⇨ 「たとえ何が(を)～しても」(副詞用法)

(ex) **Whatever happens**[may happen], I will go.

たとえ何が起きるとしても、私は行きます

Whatever he may say, I don't believe him.

たとえ彼が何を言おうとも、私は彼の言うことを信じません

②の「whatever」は、「no matter what」で置き換え可能。

また②の「whatever」の後ろにbe動詞(is/was/may be/may have been)が来る場合、

これを省略できる。

(ex) Whatever the weather (may be), we'll start at seven.

天候がどうであろうと、私達は7時に出発する

(2) 「whatever+名詞+V/ S+V～」という形もある。

whateverの後ろの「名詞」は whatever の具体的な中身を(同格的に)説明する働きをしている。省くこともできるが、そうすると whatever の指しているものが漠然となってしまう。

(ex) You may read whatever book you like.

君の好きなどんな本を読んでもよろしい

Whatever job it may be, you should do your best.

どんな仕事であろうと、全力を尽くすべきだ

例えば上の英文でも「whatever it may be」と言ってしまうと、「それがたとえ何であろうと」となってしまう、「それ」がなんなのかはっきりしなくなる。

(3)【通例否定・疑問文で、no, any, all等を伴う名詞の後で、それを強調して】「少しの～も」

=at all

=whatsoever

=of any kind

(ex) I have no sense of direction whatever[whatssoever].

私は全くの方向音痴です

Is there any chance whatever of their survival?

彼らが生き残る見込みは少しでもあるのか

Any person whatever can tell the way to the temple.

誰でもその寺へ行く道を教えてください

③の用法の whatever を知らない受験生が多い。要注意!

(3) 「no～」は「少しも～でない」「決して～ない」。

=not～any

(ex) I have no money. 私は一文なしだ

=I don't have any money.

また no は「This[It, He, She等] is no A.」の形で、「決してAではない、Aどころではない」という強い否定を表します。

(ex) She is no teacher. 彼女は教師などでは決していない(教師の資格などない)
☞ ということは職業としては彼女は「教師」であることを暗に上の英文は示している。

ちなみに

(ex) She isn't a teacher. 彼女は教師ではない

は、単に教師であることを否定しているのみ(つまり「教師以外の職業である」となります。

(4) 「neither A nor B」は「AもBも両方～でない」。

「neither～」は「両方とも～ない」。

(ex) Neither he nor I am fond of it. 彼も私もそれを好まない

☞ neither A nor B という場合の neither は品詞的には「副詞」になる。

Neither story is interesting. どちらの話もおもしろくない

☞ 「neither+名詞」という場合の neither は品詞的には「形容詞」になる。

Neither of the houses has been lived in.

どちらの家にも人は住んでいない

☞ 単独で用いられる neither は品詞的には「代名詞」になる。

(5) cannot を強調する「for the life of A(人)」

for the life of A(人) は cannot を強調して「どうしても(～できない)」という意味になります。例を挙げてみましょう。

(ex) I could not understand it for the life of me.

どうしてもそれを理解できなかった

I cannot for the life of me remember his phone number.

どうしても彼の電話番号が思い出せない

(6) 強意の(否定の)副詞としての simply, really, just.

S+simply[really/just]+助動詞+not+V [原形]～

という形で、**simply[really/ just]**が「全く～(ない)」という強意の副詞として使われる場合があります。

(ex) I **simply[really]** don't know what happened.
何が起こったのかまったく知らなかったのです

《演習》 次の2つの文を比較せよ。

(1) I don't **really** like her.

(2) I **really** don't like her.

【解説】 (1)は、「実際、実のところ」という意味で文全体を修飾している。訳は「私は彼女があまり(実のところ)好きではない。」
(2)は、強意の副詞として使われている。訳は「私は彼女が大嫌いだ。」

レクチャー2

「**far from A:全くAではない**」と「**free from A:Aがない**」の区別の仕方。

far from A は「全くAではない」、**free from A**は「Aがない」と参考書などに書いてありますが、それだけ言われても、この2つの違いや使い分け方などは、(日本人である我々には)みえてきませんね。

そこで、誰でもカンタンに見極め、使い分けができるようになる判別の仕方をご紹介します。

(1) **far from A**

far from A は「Aから遠い」という意味から転じて「Aからはほど遠い→全くAではない」という否定の意味を表します。**not~at all** で書き換えられます。また **far from** の後には「名詞(の仲間)」以外に「(being の省略された)形容詞」がこれるのも特徴の1つです。

(ex) He is **far from** (being) happy. 彼は全く幸せではない

確かに上の英文は He is not happy at all. と書き換えることができますね。

また from のうしろには(beingが省略された結果として)形容詞の happy がきています。

それから far from は以下のような表現が、決まり文句的に会話ではよく使われます。

(ex) Far from it! それどころじゃないよ、とんでもない

會会話などで、直前の内容を打ち消すのに使われる。

Far from respecting him, I dislike him.

私は彼を尊敬するどころか、嫌いなのです

會文(節)頭で用いる。 far from doing~ で「~するどころか」。

(2) free from A

free from A のAには「嫌なもの、あってほしくないもの」を表す名詞(不安・心配・苦痛等)が入ります。

(ex) Her composition is free from mistakes. 彼女の作文には間違いがない

上の英文でも、from の後ろには mistakes という、作文(composition)にとっては「あってほしくないもの」がきていますね。

また「be free of A(当然支払うべきもの): Aがない」もおさえておきましょう。

(ex) She is free of debt. 彼女は借金がない

free of charge 無料で

レクチャー3

「ほとんど~ない」と「滅多に~ない」。

hardly[scarcely] は「ほとんど~ない」、seldom[rarely]は「滅多に~ない」とこれまた参考書などには書いてありますが、この両者の違いもなかなか分かりにくいですね。しっかり整理しましょう。

(1) hardly[scarcely]とrarely[seldom]の意味の違い。

① 「hardly[scarcely]」は「ほとんど~ない」で「程度」の少なさを表す。

(ex) I can hardly [×rarely] understand you.

あなたの言っていることはほとんど分かりません

「理解できる(できない)」というのは「程度」の問題であって「頻度(回数)」の問題ではありませんね。

② 「rarely[seldom]」は「めったに～ない」で「頻度(回数)」の少なさを表す。

(ex) I rarely [×hardly] meet him. 私は滅多に彼に会いません

「会う(会わない)」というのは「頻度(回数)」の問題であって「程度」の問題ではありませんね。日本語では「ほとんど会いません」とも言えますがここは rarely[seldom]でなければなりません。

(2) 「hardly[scarcely] ever」は「滅多に～ない」。

(ex) I hardly ever [×hardly] meet him. 私はめったに彼に会いません

つまり hardly[scarcely] ever は rarely[seldom]と同じ意味になります。したがって「頻度(回数)」の少なさを表します。

(3) 「hardly[scarcely] any」は名詞を否定し「hardly[scarcely] any+名詞」の形で「(その名詞が)ほとんど～ない」。

(ex) There is hardly any time left. 残り時間がほとんどない
=There is little[almost no] time left.

つまり「hardly[scarcely] any+名詞」は「few[little]+名詞」と同じ意味で、可算名詞にも不可算名詞にも使えます。

④ 上記を含め、頻度を表す副詞の文中での位置は、not を置く位置と同じと考えると分かりやすい。

He is **not** at home.

He is **never** at home.

I do **not** know him.

I **hardly** know him.

I can **not** see Mt. Fuji.

I can **seldom** see Mt. Fuji.

④その他の副詞の位置は一般的に「場所+様態+時」の順に並ぶ。

(ex) They arrived at the airport safely yesterday.

[場所] [様態] [時]

レクチャー4

否定語を含まない否定表現。

否定語を含まない否定表現は、文法・読解問題で超頻出です。否定語がついていないだけに、それが否定表現であることを見落としてしまいやすいからです。

しっかり整理しておきましょう。

①anything but ~:全く~ない

(ex) The man was **anything but** a gentleman.

その男は全く紳士なんかではなかった

②far from ~:全く~ない

(ex) She is **far from** (being) satisfied with the result.

彼女はその結果には全く満足していない

③free from ~:~がない

(ex) The plan is **free from** danger. その計画には全く危険がない

④the last (person/thing等) to do[原形]~/関係詞節~:決して~ない

(ex) He is **the last** man to betray you. 彼は決して君を裏切りはしない

Tom was **the last** person (that) I expected to see there.

そこでトムに会うなんて全く予想外だった

⑤fail to do[原形]~:1.~しない 2.~できない

つまり「これから(まだ)~すべきままである ⇒ (現状では)まだ~していない」
となるのだ。

to do[原形]~(これから~すべき)

↓

remain C

「(依然として)Cのままである」

be yet to do[原形]~ は、be to do[原形]~ というbe to構文(この場合は「(これから)~する予定である」という意味)に、「いまだ」という意味の yet が割り込んだものと考えれば良い。そこで「いまだこれから~する予定である ⇒ (現状では)まだ~していない」となるのだ。

yet(いまだ)

↓

be __ to do[原形]~

「(これから)~する予定である」

have yet to do[原形]~ は、「(これから)~しなければならない」という have to do[原形]~に、これまた「いまだ」という意味の yet が割り込んだものと考えれば良い。そこで「いまだ(これから)~しなければならないものだ ⇒ (現状では)まだ~していない」となるのだ。

yet(いまだ)

↓

have __ to do[原形]~

「(これから)~しなければならない」

⑨修辞疑問

形は疑問文なのに、内容は疑問文ではないという英文があります。これを修辞疑問と言います。漢文でいうところの'反語表現'のことです。以下の日本文の例文で分かる通り、確かに形は疑問文ですが内容は否定文ですね。

(ex) 「やつが負けるなんてことがあるだろうか(いやない)」

英語におけるこの種の表現については、例文をたくさん見ることで慣れるのが一番です。

(ex) Who knows what will become of the world?

この世界がどうなるかなんて誰が知っていようか(いや誰も知らない)
=No one knows what will become of the world.

What is the use of asking him for help?

彼に助けを求めて何の役に立つだろうか(いや何の役にも立ちほしない)
→ 彼に助けを求めても無駄だ
=It is no use[good] asking him for help.

How can I ever thank you?

どうしたらあなたに感謝の気持ちを表せるだろう(いやできない)
→ お礼の申し上げようもありません
=I don't know how to thank you.
=I cannot thank you enough.

Who will believe the rumor?

誰がそんな噂を信じるだろうか(いや誰も信じない)

Can we ever forget his kindness?

彼の親切を忘れることができようか(いやできない)

Does it matter?

それは重要だろうか(いや重要ではない) → そんなことかまうもんか

ただし、その英文が普通の疑問文なのか、修辞疑問なのかを文脈・状況・イントネーション等で判断しないとイケない場合もありますから、注意は必要です(しかしこれは日本語でも同じですね)。

レクチャー5

部分否定。

部分否定とは「～というわけではない」と訳すもののことですが、どういう場合にこれが起きるかということがわかっているならば、部分否定の表現をすべて暗記する必要はありません。では、それはどういう場合かというと、「例外がない(例外を認めない)ような形容詞・副詞(「すべて」「完全に」「いつも」「必ず」等)に not がついたとき」に起きる

(つまりその場合に「～というわけではない」という意味がつけ加わる) のです。

- (1)nct+all 「全て～というわけではない」
- (2)nct+every 「 " 」
- (3)nct+both 「両方～というわけではない」 ※ちなみに「両方(とも)～ない」は neither
- (4)nct+always 「いつも～というわけではない」
- (5)nct+necessarily 「必ずしも～というわけではない」
- (6)nct+altogether 「まったく～というわけではない」
- (7)nct+entirely 「 " 」
- (8)nct+wholly 「 " 」
- (9)nct+quite 「 " 」

[その他]absolutely:「完全に」 exactly :「正確に」 each :「それぞれの」
whole :「全体の」 completely:「完全に」 generally:「たいてい」

(ex) You don't need to be afraid of all snakes. **Not all** of them are poisonous.

全てのヘビをこわがる必要はない。全てのヘビが毒があるというわけではない

I don't know **both** his parents, but I do know his father.

私は彼の両親とも知っているわけではないが、実際、父親の方は知っている

レクチャー6

二重否定。

①数学で「マイナス×マイナス＝プラス」になるように、英語でも**二重の否定は、(強い) 肯定にります**。以下は二重否定を用いた決まり文句です。

①never[can't] do[彫]～ without doing… : ～すれば必ず…する

(ex) They **never** meet **without** quarreling. 彼らは会えばいつも喧嘩する
=They **can't** meet **without** quarreling.
=Whenever they meet, they quarrel.

②never fail to do[彫]～: 必ず～する [習慣的行為]

hardly[scarcely] fail to do[彫]～ : 必ずと言っていいほど～する

(ex) He **never fails to** go for a walk before breakfast.

彼は必ず朝食前に散歩する

③ **don't fail to do**[願]～: 必ず～する

[一回限りの行為]

(ex) **Don't fail to** post this letter. 必ずこの手紙をポストに入れてくれ

=Be sure to post this letter.

=Don't forget to post this letter.

=Remember to post this letter.

レクチャー7

その他の注意すべき否定の慣用表現。

(1) **cannot~too...:** ～して(であって)…しすぎる(でありすぎる)ことはない

このイディオムは、解釈問題などで意味を理解するのに苦労しますね。そこでこれを解決する裏技は、この表現は「**命令文**」あるいは「**should+do**[願]～」で書き換えられる、と覚えておくといいでしょう。

(ex) You **cannot** be **too** careful in choosing your friends.

=Be (very) careful in choosing your friends.

=You should be (very) careful in choosing your friends.

友だちを選ぶのに注意してしすぎることはない

→ 友だちを選ぶのには注意すべきだ

You **cannot** know **too** much about the language you speak everyday of our life.

=You should know much about ~.

我々が日常話す言葉についていくら多く知っていても知りすぎることはない

→ いくら知識があってもいい／知識はたくさん持つべきだ

(2) **not~until...:** …して(になって)はじめて～

(ex) I **didn't** know the news **until** last night.

昨日の夜までその知らせを知らなかった

→ 昨日の夜になってはじめてその知らせを知った

否定文の後に until+A(語・句・節)が続く場合、直訳は「A(する)まで～しない」ですが、「Aして(になって)初めて～する」と訳すと、上例のようにこなれた良い和訳になります。

更に上記の英文は、「It is not until... that S+V～」で書き換えることができます。これは not until...を強調した強調構文です。

→ It was not until last night that I knew the news.

そして更に「It is」と「that」を省略して、Not until...が文頭に出た書き換えも可能です。ただしその場合、主節の部分は「疑問文と同じ語順」になるのがルールです。

→ Not until last night did I know the news.

【疑問文の語順】

(3)「まもなく～するだろう(した)」

①It will not be long before S+V～. 「まもなく～するだろう」

(ex) It won't[will not] be long before he can speak English.
すぐに彼は英語を話せるようになるだろう

②It is not long before S+V～. 「まもなく～する」

(ex) It was not long before I realized the trick.
まもなく私はその計略に気付いた
=I realized the trick before long.
=I realized the trick soon.

④この表現は、上例のように before long, soonで書き換えられる。

倒置

倒置(Inversion)とは、主語と動詞が、その通常の語順である「S+V」から、

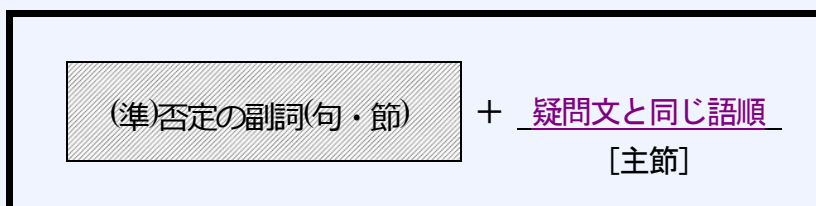
- ①文法上の理由
- ②ある語句を強調するため

といったことが原因となって「V+S」の語順になることを指して言います。
様々な倒置のパターンをでは、一つ一つ見ていくことにしましょう。

レクチャー1

(準) 否定の副詞の倒置。

(動詞を修飾する)「(準)否定の副詞(句・節)が文頭に飛び出すと、その後の主節部分は「疑問文と同じ語順」になる」というルールがあります。



※「主節」とは接続詞等のついていない裸の「S+V」のこと。

「(準)否定の副詞(句・節)」とは以下のようなものです。

- ①否定の副詞 句)… never「決して～ない」
on no account「決して～ない」
in no sense[way]「決して～ない」
in[under] no circumstances「決して～ない」
- ②準否定の副詞 句)… little「ほとんど～ない」 few「ほとんど～ない」 rarely「めったに～ない」
no sooner「ほとんど～ない」 scarcely「ほとんど～ない」
seldom「めったに～ない」 only「～して初めて、～のみ(しか)」
not until「～して初めて」 hardly「ほとんど～ない」

このルールを逆に利用して、「(準)否定の副詞(句・節)」が文頭に飛び出した英文に出くわした場合、「疑問文と同じ語順になっている箇所」がその英文の主節だと判断できることも、読解問題などでは大切です。

① 「[否定の副詞]+疑問文の語順(主節)」パターン。

(ex) Never[Little] did I dream that she would win the contests.

彼女がコンテストで優勝するとは夢にも思わなかった

Hardly had she left home when it began to rain.

彼女が家を出たとたん雨が降り出した

② 「[否定の副詞句]+疑問文の語順(主節)」パターン。

(ex) In no circumstances will I allow you to go there.

いかなる事情があろうとも私は決して君がそこへ行くことを許さない

In no other part of the world is more tea consumed than in Britain.

世界中で英国ほど紅茶を飲む所はない

③ 「[否定の副詞節]+疑問文の語順(主節)」パターン。

(ex) Not until we lose our health do we realize its value.

健康を失ってはじめてそのありがたさがわかる

罫Not until A(語・句・節)で「Aして(になって)初めて」。

特に解釈などで、「not only A but also B: AだけではなくてBもまた」の構文で、not only が文頭に出て、Aに当たる部分が「疑問文の語順」になるというパターンがよく出題されますから要注意です。

(ex) Not only does Tom say what should be said but also he does what should be done.

トムは言うべきことを言うだけではなく、やるべきこともまたやる

only は「時」「方法」を表す語句とセットで「～して初めて(ようやく)」と言う意味になり、これも文頭で「only+句」「only+節」の形でよく使われ、その後の主節は「疑問文と同じ語順になります」。

(ex) Only afterward did he explain why he did it.

あとになって初めて、それをやった理由を彼は説明した

Only in that way did they manage to get their destination.

その方法によってはじめて、彼らは目的地に到着することができた

Only on one point do I agree with you.
ただ1点でしかあなたとは意見が一致しない

Only when it rains do you feel cool.
雨が降る場合しか涼しく感じない

レクチャー2

「Sもまた…しない」「Sもまた…する」の表現。

(1)基本ルール。

肯定文の後ろで「So V+S」という形で「Sもまた～だ」、否定文の後ろで「Nor[Neither] V+S」という形で「Sもまた～ない」という意味を表します。

- | | | |
|---------------------------|---|-------------------------------|
| ① S ₁ +V～ | ⇒ | So+V+S ₂ |
| 「S ₁ は～だ」[肯定] | | 「S ₂ もまた～だ」 |
| ② S ₁ +not+V～ | ⇒ | Neither[Nor]+V+S ₂ |
| 「S ₁ は～ない」[否定] | | 「S ₂ もまた～でない」 |

注意してほしいのは、SoやNeither[Nor]の後の動詞は前の文の動詞の種類に合わせるという点です。

前の文の動詞		SoやNeither[Nor]の後の動詞
一般動詞	→	do/does/did
be動詞	→	be動詞
完了形	→	have/has/had
助動詞	→	前の文と同じ助動詞

(2)引っかけ問題。

以下のような引っかけ問題に注意が必要です。

A: Are you pressed for money?

B: So ().

- ① am I ② I am ③ do I ④ I do

この問題の正解は②になります。実は「So V+S」とよく似た表現に「So S+V」というのがあるのです。これは前述の内容を受けて「(Sは)その通りです」「おっしゃるとおりです」という、「同意・確認」を表す表現です。「So V+S」との見極め方は以下の通りです。

- ① 「So V+S」は、直前の文(節)の「主語」と、「So V+S」の「S」は同一(人)物にならない

(ex) A: He is a teacher. 彼は教師です

B: So I am. 私もまた教師です ☞ He ≠ I

確かに上の英文のAの主語(He)と、Bの主語(I)は別人物ですね。

- ② 「So S+V」は、直前の文(節)の「(意味上の)主語」と「So S+V」の「S」は(人)物となる

(ex) A: I think you are in trouble. 君は困っているんじゃないかい

B: So I am. その通りです ☞ you = I

確かに上の英文のAのbe動詞の主語(you)とBの主語(I)は同一人物ですね。(直前の文中に置ける、「So S+V」の「V」と)同種の「V」の主語との関係を見る。したがって上の例文でも「So S+V」の「V」がbe動詞(am)だったので、直前の文中のそれと同種の「V」である are の主語(you)に着目するのだ)。

會ただ「A=Bとみなす(言う)」型の英文では「A = (So S+Vの)S」となることがある。以下の例文の consider は、consider A to be B で「AをB(A=B)とみなす」型の動詞。

① C+V+S

② C+S+V (主語が代名詞の場合)

例文いくつか挙げてみましょう。

(ex) Happy are the people who love flowers. 花を愛する人は幸いである

C V S

Right you are. 君が正しい ☞主語が代名詞の場合は「C+S+V」の語順になる。

C S V

「S+V+C」構文の倒置で、下線部和訳等で最も出題されるのが以下の2つの構文です。

① S+V+so ~ that S+V… :とても～なので…する

② S+be動詞+such that S+V…:Sは大変なものなので…する

この2つの構文については「so～」 「such」が文頭に飛び出すと、主節は疑問文と同じ語順になります。以下にその例を挙げてみましょう。

(ex) So strong was his belief that he would never change his mind.

上の英文は元々、His belief was so strong that he would ~. という語順でしたが、so strong が倒置されて文頭に出た結果このような語順になったのです。訳は「彼の信念はとても強かったので彼は決心を決して変えなかった」。

(ex) Such was his anger that he became ill.

上の英文は元々、His anger was such that he became ill. という語順でしたが、such が倒置されて文頭に出た結果このような語順になったのです。訳は、「彼の怒りは大変なものだったので、彼は病気になってしまった」。

(3)O(目的語)を強調するパターン。

O(目的語)をとる文型は「S+V+O」「S+V+O₁+O₂」「S+V+O+C」の3つがありますが、それぞれのOが文頭に出た場合、以下のような語順になります。

① 「S+V+O」のOが文頭に飛び出すと全体は「O+S+V」の語順になる

② 「 $\textcircled{S}+\textcircled{V}+O_1 O_2$ 」の O_2 が文頭に飛び出すと全体は「 $O_2+\textcircled{S}+\textcircled{V}+O_1$ 」の語順になる

③ 「 $\textcircled{S}+\textcircled{V}+O+C$ 」の O が文頭に飛び出すと全体は「 $O+\textcircled{S}+\textcircled{V}+C$ 」の語順になる
⚠「 $C+S+V+O$ 」のパターンはないわけではないが数は少ない

要するに O (目的語)が文頭に出ても、倒置($S+V \rightarrow V+S$)は起こりません。
これもいくつか例を挙げてみましょう。

(ex) This trip to Hokkaido, I will never forget.

○ ③ ④

今回の北海道旅行を私は決して忘れないだろう

上の英文は、元々 I will never forget this trip to Hokkaido. という語順だったものが、目的語部分が文頭に飛び出して上のような「 $O+S+V$ 」の語順になっています。

(ex) Whether he will come or not I cannot tell you.

O_2 ③ ④ O_1

彼がくるかどうかをあなたにお伝えできません

上の英文は元々、tell $O_1 O_2$ (O_1 に O_2 を言う・伝える)を下敷きにした以下のような $S V O_1 O_2$ だったのですが、 O_2 の whether節が文頭に移動してこのような語順になったわけです。

→ I cannot tell you whether he will come or not

③ ④ O_1 O_2

(ex) Jack I consider a coward[臆病者] if he does nothing for her.

○ ③ ④ C

もし彼女のために何もしないのなら私はジャックを臆病者とみなします

上の英文の下敷きになっている構文は consider $O C$ (O を C とみなす)ですが、その O にあたる Jack が文頭に移動し、このような語順になってしまっています。元々は以下のような語順でした。

→ I consider Jack a coward if he does nothing for her.

③ ④ ○ C

目的語が文頭に飛び出す場合の例外的なルールがひとつあります。それは、目的語に否定語(又はそれに準じる語句)がつく場合には、後ろ(主節)は疑問文と同じ語順になる、というルールです。

(ex) Not a word did I say. 私は一言もしゃべらなかつた
0 [疑問の語順]

上の英文の場合、a word は(sayの)目的語なのですが、not という否定語と一緒に文頭に飛び出したために、主節は疑問文と同じ語順になってしまっていますね。

(4)慣用的な「倒置」。

①仮定法のifが省略されると、条件節は疑問文と同じ語順になる。

仮定法のif節(条件節)の if が省略されると、その条件節は「疑問文と同じ語順」になります。まずわかりやすいように、if節だけを取り出した例をいくつかまずあげてみましょう。

(ex) If I were a bird, → Were I a bird,
If I had had money, → Had I had money,
If it should rain, → Should it rain,
If I were to die now, → Were I to die now,

今度は、1つの文の形をした例をあげてみましょう。

(ex) Could I see him once more, I would be happy.
もし彼にもう一度会うことができればうれしいのですが

上の英文の前半は元々 If I could see him once more だったものが、If が省かれてこのようになりました。

この種の倒置の見きわめのポイントは以下の2つです。

①主節に「助動詞の過去形」「助動詞の過去形+have+p.p.～」がある。

⚠ただしIf節にshouldが入る仮定法(もし万一～なら)の場合、主節に、「助動詞の過去形」がこないこともあるので注意。

(ex) **Should anyone call me, please take a message.**

=If anyone calls me, please take a message.

もし万一誰かから電話があったら、伝言をきいておいてください

②?(クエスチョン・マーク)が文末にないのに、疑問文の語順になっている節が文中にある。

この2つのポイントがあてはまる英文に出くわしたら、(仮定法の)ifの省略を疑ってみるといいでしょう。

②文のバランスをとるための倒置

1. 「There + be動詞 + ㊸」。

「There + 一般動詞 + ㊸」。

there is構文として、みなさんにもおなじみの構文です。文頭を軽くするために there を文頭においてバランスをとっています。例を挙げてみましょう。

(ex) There are some foreign students in our school.

私たちの学校には外国からの留学生が何人かいます

それから「There + 一般動詞 + ㊸」となる場合の ㊹ (一般動詞)には come, live, remain, stand, exist等、「存在・往来」を表す動詞がきます。

(ex) There stands a castle on the hill. 丘の上に城が建っている

訳す場合には、(There は省いてしまい) A castle stands on the hill. と、頭の中で「㊸+㊹」の語順に戻してみるといいでしょう。

2.比較の than や as[so]~as の後の倒置。

比較の than や as の後ろの「S+V」の「S」が長すぎる場合(や比較の対象同士を明確にしたい場合)に、SとVがひっくり返って「V+S」となることがあります。例を挙げてみましょう。

(ex) He loves her more than does his big brother.

V S

兄が愛するよりもっと彼は彼女のことを愛している

上の英文は、than 以下は本来 his big brother does[=loves] (her) となる

べきところが、Sが長いためにSとVがひっくり返ってしまっています。
なお than や as の後ろではVは代動詞になることが多いです。上の例文でも、
一般動詞の繰り返しを避ける does が使われています。

語順

レクチャー1

間接疑問文の疑問詞節内の語順。

疑問詞節(又は whether[if]節)が文の一要素(S・O・C等)になる、いわゆる「間接疑問文」においては、疑問詞の後の語順が平叙文(つまり疑問文ではない普通の文)の語順に戻る点に注意しましょう。たとえば

When will he arrive?

と、疑問詞から始まる疑問文では、疑問詞の後ろは「疑問文の語順」になるのにその when節が目的語となった以下の英文では、when の後ろは平叙文の語順にしなければなりません。

Do you know {
× when will he arrive?
○ when he will arrive?
[平叙文の語順]

レクチャー2

「do you think[suppose/ believe等]」と「do you know」の語順が狙われることがある。

「do you think[suppose/ believe等]」や「do you know」が疑問詞と共に使われる場合、「do you think[suppose/ believe等]」は疑問詞の後ろに置かれ、「do you know」は疑問詞の前に置かれます。

そしてどちらもその後ろは「平叙文」の語順になります。

(1) 疑問詞 + do you think[suppose/believe等] + 平叙文の語順(S+V)?

(ex) What do you think I should do next?

僕は次に何をすべきだと(君は)思う?

(2) Do you know + 疑問詞 + 平叙文の語順 (S + V)?

(ex) Do you know what time it is now?
今何時か知っているかい?

レクチャー3

副詞の「so」「as」「how(ever)」「too」の直後に、冠詞の「a」を置くことはできない。

副詞の「so」「as」「how(ever)」「too」の直後には、冠詞の a を置くことができません。したがって、これらの語の後ろに「a 形容詞+名詞」が来る場合、

「形容詞+a+名詞」

の語順になります。例を挙げてみましょう。

(ex) He is so good a boy that he is loved by everybody.
彼はとてもいい子なので、みんなから愛されている

上の英文でも、決して so a good boy とは言えません。

ただし such の場合は直後に a を置くことが可能です。したがって上例は、such を用いて以下のように書き換えることができます。

(ex) He is such a good boy that he is loved by everybody.

また、as には前置詞(～として)もあります。前置詞の as の場合は、直後に a を置くことができます。

(ex) as a good father: 良き父として ☞「前置詞」の as。

副詞の as とは、「as ~ as A:Aと同じくらい~」という場合の as のことです。

(ex) This is not as difficult a question as it seemed at first.
この問題は初めに思ったほど難しくない

ついでに how と too の例も挙げておきましょう。

(ex) How tall a man is he? その人は身長がどのくらいの人ですか

It is too small a hat for you. その帽子は小さすぎて君にはかぶれない

レクチャー4

その他の語順のルール。

(1)

「**形容詞(副詞・名詞)** + as + S + V」で「Sは~だけれど」。

(ex) Unbelievable as it was, I passed the entrance examination.

信じられないことだったが、私は入学試験に合格した

このように as の前に「形容詞(副詞・名詞)」が飛び出した(譲歩を表す)構文があることを頭に入れておきましょう。この構文は though や although を用いて以下のように書き換えることができます。

=Unbelievable though it was, I passed the entrance examination.

=Though/Although it was unbelievable, I passed the entrance examination.

(2)関係詞とその先行詞は離ればなれになることがある。

(ex) The time has come at last when he must sell his horse.

[先行詞]

[関係詞節]

彼が自分の馬を売らなければならない時がついにやってきた

(3)「S+V+O+C」が「S+V+C+O」の語順になることがある。

どういう場合にこれが起きるかという、Oが長すぎる場合です。このよう

に英語というのは長くなるとすぐに後ろに回されてしまう言語なんです。このルールについては、仮主語構文や仮目的語構文でみなさんもよく知っていますね。

(ex) Don't leave undone what you should do.

⓪ C O

やるべきことをやらずに置くな → やるべきことをやりなさい

上の英文は元々「leave O C: OをCのままにしておく」の構文でできており、本来なら

Don't leave what you should do undone.

⓪ O C

とすべきところですが、O(what you should do)が長すぎるためにOとCが入れ替わってしまっています。

(4) 「S+V+O+M(副詞)」が「S+V+M(副詞)+O」の語順になることがある。

これもそれが起きる理由は先程と同じで、Oが長すぎる場合です。下の英文を見てください。

(ex) He added to his tea a little sugar and milk.

彼は紅茶に砂糖とミルクを少し加えた

add は元々「add A to B: AをBに加える」という語法があり、本来ならその語順になるべきところが、目的語にあたるA(a little sugar and milk)が長すぎるために後回しにされ、to his tea と入れ替わって「add to B A」の語順になってしまっています。

He added to his tea a little sugar and milk.

B A

このタイプの倒置の見破り方として、「V+(前)+A(名)」という構造の後に、S・O・Cといった特定の役割を持たない「名詞」を発見したら、「S+V+M+O」型の倒置ではないかと疑ってかかってみると考えるのも一つの方法といえます。

(5) 「同格節」と、それが修飾する名詞とが離ればなれになることがある。

同格のthat節を例にあげてみましょう。

「思考」「認識」「発言」「事実」等を表わす名詞の後に、that節が置かれて、そのthat節が(直前の)名詞の内容を具体的に説明することがあります。

(ex) He denied the fact that he had not carried out his duty.

彼は自分が職務を果たさなかったという事実を否定した

上の英文でも that節は、直前の名詞(fact)を説明して言い換えています。

☞同格のthat節は「～という〇〇」と訳す。

ところがこの(同格の)that節と、それが修飾する名詞が離ればなれになることがあります。

(ex) The thought occurred to Mary that she might never see Jim again.

㊟[名詞]

㊿

[同格節]

ジムに会うことは二度とないかもしれないという思いがメアリーの頭に浮かんだ

☞「A(物事) occur to B(人):AがBの心に浮かぶ」が下敷きになっている。

このような語順変化が起こる理由は、そのままの語順だと読者からみて文構造がわかりにくくなってしまうからです。

レクチャー5

付加疑問文。

(1)作り方

①肯定文の後には否定の付加疑問(isn't/doesn't/didn't等の短縮形を使う)をつける。

(ex) Jack can drive, can't he[×Jack]? ☞末尾の名詞(語)は、人称代名詞を用いる。

②否定文の後には肯定の付加疑問をつける。

(ex) Susie isn't angry, is she?

③ただし命令文の場合は will you を文末につける。

㊦will you 意外にも won't you という言い方もある。won't you? の方が will you? よりも丁寧であり、勧誘の意を含む場合が多い。否定の命令文には won't you? はつけられず、will you のみ可能。

(ex) Don't touch the table, will you?

テーブルに手を触れないで下さいね

㊦can't you というと、不満、批判の意味が込められる。

(ex) Speak quietly, can't you? 穏やかに話したらどう

④Let's で始まる文の場合は shall we を文末につける。

(ex) A: Let's go bowling today, shall we? 今日ボウリングに行きましょう

B: Yes, let's[No, let's not.] そうしよう[いや、よそう]

(2)注意点

①文末の付加疑問の部分の主語は必ず人称代名詞にする。

○ Tom did the work, didn't he?

× Tom did the work, didn't Tom?

②There is[are]構文の場合は、thereを使う。

(ex) There is a park in this city, isn't there?

(3)発音する際の注意点

念を押すときは下降調子、Yes, No の答えを期待する疑問の場合は上昇調子のイントネーションになります。

強調

レクチャー1

強調の副詞。

(1) very 以外の強調の副詞。

形容詞・副詞を強調する代表選手は very ですが、very 以外にも以下のものがあります。

- ①「とても、大変に」…awfully, highly, extremely, terribly, really, simply

(ex) It's awfully hot today. 今日はとても暑い

He is a highly ambitious person. 彼はとても野心的な人物である

The problem was extremely hard. その問題はたいへん難しかった

I'm terribly worried about you.

あなたのことをすごく心配しています

- ②「全く、すっかり」…dead

(ex) He was dead asleep. 彼はぐっすり眠っていた

dead drunk 酔いつぶれて

He was dead tired. 彼はくたくたに疲れていた

- ③「全く」…absolutely

(ex) absolutely impossible[right] まったく不可能な[正しい]

☞意味上尺度の両端にくるような形容詞のみつくことができる。×absolutely good[warm]

- ④badly は「必要、病気、被害」等を意味する文脈で用いられると「ひどく、非常に」という意味になることがある。

(ex) She badly needed[wanted] the money.

彼女にはどうしてもその金が必要だった

The passenger was **badly** injured. 乗客は重傷を負った

They were **badly** defeated in the finals.

彼らは決勝でこてんぱんに敗れた

☞ **badly**には、もちろん「悪く、まずく」「下手に」「間違っ」と言う意味もある。

(ex) She speaks **badly** of him. 彼女は彼のことを悪く言う

He plays tennis very **badly**. 彼はテニスがとても下手だ

それから **badly** の比較級、最上級はそれぞれ worse, worst.

(2) 疑問詞を強調する副詞(句)。

① 疑問詞に **ever** をつけて「**疑問詞+ever**」とすると、その疑問詞の意味を強調できる

(ex) **Whoever** said so? 一体全体誰がそう言ったのだ

Whenever I see this picture, I think of you.

この絵を見るたびに君のことを思い出す

② 疑問詞の後ろに以下のような語句をつける。その部分は「**一体(全体)**」等と訳す

疑問詞 + $\left. \begin{array}{l} \text{on earth} \\ \text{in the world} \\ \text{the hell} \\ \text{the devil} \end{array} \right\}$ + 疑問文の語順？

(ex) Why **on earth** did you do that? 一体全体どうしてそんなことをしたの

What **in the world** happened? 一体何が起こったのか

What **the hell** are you doing here? 一体全体ここで何してるんだ

Who **the devil** is he? 一体あいつはだれだ

レクチャー2

2. 強調の形容詞。

(1) **single**.

single は「a single+単数名詞」で「単一 (one) 」の意味を強調します。

(ex) He has not a **single** penny with him. 彼はびた一文も持ち合わせていない

(2) **possible**(~できる限りの、この上ない)と **imaginable**(想像でき得る限りの)。

possible, imaginable は、以下の場合強調語として用いられることがあります。名詞の前、後ろどちらにも置けますが、名詞の後ろに置く方が強調の意味が強まります。

①(possible・imaginable が)最上級や序数と共に使われている

(ex) the best **possible** chance この上もない好機
=the best chance **possible**
the worst **imaginable** record 想像し得る最悪の記録
=the worst record **imaginable**

②(possible・imaginable が) **all, every, any, no**等と共に使われている

(ex) with all **possible** kindness 精いっぱい親切で
do everything **possible** できる限りのことをする
every method **imaginable** ありとあらゆる方法
a book of no **imaginable** literary value
文学的価値がまったくない本

possible, imaginable に限らず -able, -ible型の形容詞は、上記のルールがあてはまる場合、単独で名詞を後ろから修飾することがあります。その場合、(最上級の形容詞のついた名詞につけて)の名詞の範囲を限定する働きをします。

(ex) the latest information **available** 入手しうる最新の情報
I'll leave here by the first flight **available**.
最初に乗れる飛行機で立ちます

上の英文の場合、available は直前の the latest information、the first flight を修飾しています。もちろん the first available flight、the latest available information としても間違いではありません。

(3)形容詞の very。

形容詞の very は(「the very+A(名詞)」 「one's very+A(名詞)」)として名詞を強調できます。

形容詞の very の訳し方は、基本的には「まさにその～」でいいのですが、細かなニュアンスの違いもあるので、下の例文でよく確認しておくといいいでしょう。

- 《適応性を強調して》 「ちょうど」「ぴったり」「まさに」
《同一性を強調して》 「まったく同じ」「ほかならぬ」「…そのもの」
《驚き・事の重大性を示して》 「まさに」「ただ～(な)だけで」「～で(に)すら」
《反対を表す語を強調して》 「まったく(反対だ)」

(ex) the very thing for the purpose その目的にまさにぴったりの物

before[under] my very eyes 私のすぐ目の前で

He was the very man for such a position.

彼はそういう地位にまさにうってつけの人物だった

I've just arrived here this very minute.

たった今ついたばかりだ

He talked to me in this very room.

彼はほかならぬこの部屋で私に話しかけた

The very thought of it is distressing.

そのことを考えるだけでも胸が痛む

She came to dread his very name.

彼の名前を聞いただけで彼女は恐れるようになった

The lion's roar caused the very rocks to tremble.

ライオンの唸り声は岩をも震わせた

レクチャー3

強調語としての助動詞 do[does/ did]。

一般動詞の前に do[does / did]を置いて、後の動詞の意味を強める用法があります。その場合「do[does / did]+動詞の原形」の形にします。命令文でも使えます。和訳では「実際に」「本当に」などと訳します。例を挙げてみましょう。

(ex) I do want to see her. 本当に彼女に会いたい
Do be careful. 十分に気をつけなさい

レクチャー4

強調構文。

(1)強調構文とは。

強調構文とは、It is □ that~ の形で、□の部分に自分が強調したい語(句)を入れるというものです。この強調構文をつくる that については、品詞は考えなくて結構です(関係詞だ、接続詞だ...と言いきれないので)。

下記の英文を強調構文にせよという場合、それぞれ以下のようになります。

I saw Jack at the party a week ago.

一週間前私はパーティでジャックを見た

①Jack を強調したければ

☞ It was Jack that I saw at the party a week ago.

②I を強調したければ

☞ It was I that saw Jack at the party a week ago.

③at the party を強調したければ

☞ It was at the party that I saw Jack a week ago.

④a week ago を強調したければ

☞ It was a week ago that I saw Jack at the party.

(2)強調構文か? 仮主語構文か? その見極め方。

It is ~ that ... となるという点では、強調構文と仮主語構文は区別がつきにくいですね。そんな区別のつきにくい両者を、一瞬で見極める方法を紹介しましょう。

①It is と that の間に「形容詞・分詞」や「副詞(句・節)」がある場合。

It is と that の間に「形容詞」や「分詞」があったら、それは仮主語構文だ

とみて間違いありません。

It is と that の間に「副詞(の仲間)」があったらそれは強調構文だとみて間違いありません。

1. It is 形容詞・分詞 that 完全な文 ・ 🗨️ 仮主語構文
2. It is 副詞(句・節) that 完全な文 ・ 🗨️ 強調構文

副詞(の仲間)とは、具体的には以下の3つです。

①副詞一語

(注)語尾が～lyで終わることが多い。あるいは'yesterday'のような時を表す名詞も副詞として用いられることが多い。

(ex) It was recently that the accident happened.

It was yesterday that I finished this work.

②前置詞+名詞

(ex) It was at nine thirty that I came home.

③接続詞+S+V～

(ex) It was since I was ill that I couldn't come here.

ただし「前置詞+名詞」が形容詞句になっている場合は例外。仮主語構文とみなし「前置詞+名詞」がC(補語)になっているとみる。

そのような代表例としては「of+抽象名詞」や「beyond+範囲・限界を表す名詞」など。特に「of+抽象名詞」は形容詞化するというルールは頻出。

以下はすべて仮主語構文(that節が真主語)。

(ex) It is of importance that you should study hard.

=important

君が一所懸命勉強することが大事だ

It is beyond belief that he was killed in the accident.

=unbelievable

彼がその事故で死んだということが信じられない

It was beyond a joke that you said such a thing in public.
人前でそんなことを言ったのは冗談の域を超えている

②It is と that の間に「名詞(句・節)」がある場合。

It is と that の間に「名詞(の仲間)」があった場合、that の後ろの英文が「完全な文」なら仮主語構文、「不完全な文」なら強調構文とみていいでしょう

1. It is 名詞 that 完全な文 . 📖 仮主語構文

2. It is 名詞 that 不完全な文 . 📖 強調構文

③注意すべきポイント。

1. 「不完全な文」とは、S(主語)・O(目的語)・C(補語)のどれかが欠けた文のこと。

2. It is~thatの構文で、thatの後ろが「不完全な文」であれば、それは強調構文と見てほぼ間違いない

📖もちろん文頭のItが直前の単数名詞や直前の内容を指す代名詞、その後のthatが直前の名詞にかかる関係代名詞という英文中中にはあるので、先頭のItが文中で役割を持っているかどうかを確認する必要がある。つまりそのItが「それ」と訳せるなら強調構文ではない。逆にそのItが訳がつかない(文中での役割を持っていない)のなら強調構文ということになる。下の英文は強調構文のように見えるが、Itは「それ」と訳せ、またthatは単なる関係代名詞で、強調構文ではない。

(ex) It rained suddenly. It was a problem that we had been
[関・代] worried about.

突然雨が降ってきた。それは私たちが心配をしていた問題だった

3. 強調構文だとわかったら、It is と that をカッコでくくってしまうといい。すると文の骨組みが浮かび上がってくる。

4. 強調したい語(句)が「人」の場合は、that の代わりに who, whom が使われ

ることもある。

(ex) It is Tom **who** broke the window. 窓を壊したのはトムなんです

It is Nancy **whom** Jack loves. ジャックが好きなのはナンシーです

5.また強調したい語(句)が「物(事)」の場合は、that の代わりに **which** が使われることもある。

(ex) It is the dog **which** bit me yesterday.

昨日私を噛んだのはその犬です

bite-bit-bitten:かむ

It is the PC **which** I want to buy.

私が見たいのはそのパソコンです

6.強調構文が下線部訳問題になっていた場合、うまく和訳するポイントは、上記の例文の訳し方のように、**強調されている語句を和訳の最後にもってくる**ことである。

ただし、以下のように強調されている語句が「only+語(句・節)」の場合は、「～してはじめて(ようやく)…した」と、前から普通に訳せばいい。

(ex) It was **only** through their help that we coped with the crisis.

彼らの助けによってようやく私たちその危機を乗り越えることができた

7.イディオム的な強調構文として以下の構文は頻出。

It is[was] not until～ that S+V….: 「～してはじめて…する[した]」

(ex) It is not until we lose our health that we realize its value.

健康を失ってみてはじめてその価値が分かる

8.疑問詞付き疑問文の強調構文。

疑問詞付き疑問文の強調構文の公式は以下の通りです。

疑問詞 is[was] it that+平叙文の語順?

要するに、疑問詞の後ろに「is[was] it that」を置き、その後を「平叙文の語順」に戻すわけです。たとえば以下のような普通の疑問文の場合、

(ex) What do you want to know? 君が知りたいのは何ですか

これを強調構文にすると以下ようになります。

What **is it that** you want to know?

[平叙文の語順]

和訳の際には is[was] it that の部分を()でくくってしまうといいでしょう。